松山市久谷地区におけるお接待所坂本屋が担う地域的な役割

西岡寧々・堀江貫太・須藤　恵・松崎竜大

キーワード：四国遍路，お接待，坂本屋，松山市久谷地区

Ⅰ．はじめに

1）研究背景・目的

宗教現象を対象とする人文地理学的研究は，巡礼にも関心を向けてきた。このことは聖地を巡るという宗教的行為が，地域構造とどのような関係にあるのか，また巡礼の聖地そのものが有している地理学的構造や巡礼地と巡礼者との地域的関係はどのようなものであるかといった諸問題が地理学的な関心を喚起したからだと言える（松井，1993）。インドのガンジス川やサウジアラビアのメッカなど世界中には多くの聖地巡礼が存在するように日本には四国遍路と呼ばれる巡礼がある。Tanaka（1981）は四国遍路の巡礼景観，独自の文化，自然条件は象徴的な価値を有しており，巡礼地の起源がその象徴的な文化と適合していることを論じている。これは四国遍路にのみ当てはまる現象ではなく，日本の他の巡礼，ひいては他の宗教的行為においても当てはまることを指摘した。近年，四国遍路は世界中からも注目されており，コロナ禍以前は外国人の遍路者が年々増加傾向にあった。外国人にとっての四国遍路の魅力として，四国の人々の親切さが挙げられる。お接待文化に代表されるように，四国の人々は巡礼する人を敬う気持ちが強く，外国人を手厚くもてなしてくれる。それから自然や昔ながらの日本の景観が残っている様子（建物，風習）等も魅力である。また，遍路のルールが自由であるところや清潔なトイレ，自動販売機，温泉，コインランドリー，コンビニ等の設備，行程上の安全性と便利さも外国人に喜ばれている（モートン，2020）。遍路道はそのルート，形態，景観などの属性を持つ。地理学においては，絵図や体験記をもとに，古い遍路道の比定がなされ，また寺院や遍路道の有する空間構造が考察されている（森，2001）。四国に根付いた遍路文化を支えているのはお接待をはじめとする四国の住民の存在であり，遍路文化も彼らに地域的な役割を与えている。そのため，四国遍路を語るうえで不可欠なお接待文化の地域的な役割や実状を研究することは，四国遍路の地域的価値を知るうえで重要である。

そこで本稿では，久谷地区に立地している四国遍路のお接待所である「坂本屋」の活動内容から，その地域的な役割を明らかにすることを目的とする。上記の目的を明らかにするために，四国遍路や土佐街道，坂本屋が立地している松山市久谷地区に関しての文献調査を行った。そして，2021 年 10 月から 12 月にかけて，坂本屋，渡部家住宅，丹波の里の各お接待所に活動内容や地域との関わりに関する聞き取り調査を行った。聞き取り調査では，坂本屋設立の背景や活動内容，坂本屋運営委員会の会員属性，坂本屋に所属することになったきっかけや参加動機などについて調査した。

この聞き取り調査では，過去に坂本屋を訪れた遍路者について記録したノートのデータを入手するとともに，坂本屋運営委員会の会員の属性データ，坂本屋の活動内容に関するデータを入手した。これらのデータを利用して，お接待所として坂本屋が人々に与えている影響，また久谷地区に坂本屋があることで果たしている地域的な役割を明らかにする。

2）四国遍路について

一般財団法人へんろみち保存協力会編（1990）によると，四国八十八箇所霊場は讃岐（香川県）に生まれた空海（弘法大師：774 年～835 年）が修行を行った地として伝えられる寺々のことで，弘法大師信仰に基づき，大師の足跡を訪ねて八十八箇所を巡礼することを四国遍路と言う。四国遍路の起源は平安時代の修行僧と言われ，室町時代から江戸時代初めにかけて一般庶民にも広がり，現在に至るまで絶えることなく続いている。徳島県の 1 番札所霊山寺から，高知県，愛媛県を回り，香川県の 88 番札所大窪寺まで，四国遍路の行程は四国一周約 1,400km に及ぶ。八十八箇所の中には，厳しい修行が行われたことをしのばせる急峻な山岳の寺もあれば，町中や田園風景の中に建つ寺もある。また，札所間の距離が近い所がある一方，次の札所まで数 10km もあるといった所も少なくない。八十八箇所の霊場を歩いて巡る道を遍路道と言う。遍路道は，本来，巡礼専

用に設定されたものではなく，地域の人々の生活道や農道・林道などとして利用されてきた。そのため時代と共にルートの変遷もあるが，その時々の地域社会の中で遍路道は維持管理され守られており，札所を巡るお遍路を迷うことなく導いてきた道標や丁石が現在も各地に残っている。また，四国遍路を巡礼するものを遍路者と言う。現代の四国遍路では，ライフスタイルや交通手段の多様化により，「ゆるい遍路」になってきている。その自由さが四国遍路の魅力になっていると言える。

3）お接待について

四国には「お接待」という文化が根付いている。お接待とは，遍路者にねぎらいのおもてなしをすることである。具体的には，お茶や食べ物をふるまったり，金銭を与えたりする。遍路者が休憩するために作られた施設をお接待所と言い，遍路者が宿泊するための簡易的な宿を善根宿と言う。四国に住む人は遍路者が過酷な旅であることを知っているため，遍路者を応援する気持ちを込めてお接待をする。四国遍路には，一人で歩いていても弘法大師がついていて，その守りを受けるという「同行二人」という考え方がある。お接待には，弘法大師に対してもお接待をし，お接待をする側に御利益があるという意味もある。四国では遍路者は大師様と同じと考えるため，お接待は「大師様への功徳」なのである。また「自分の代わりにお参りを託す」という意味もあるため，お賽銭など現金を渡されることもある。そのため，良心がとがめたとしても，お接待を断るということは同行二人の観点から良くないものとされている。お接待は基本的に断らず，ありがたく受けるのがマナーとなっている。お礼に「南無大師遍照金剛（なむだいしへんじょうこんごう）」と唱えて納札を手渡すのが作法とされているが，心から感謝の言葉を述べるケースが多い。「ゆるい遍路」となった今，遍路者自身の考えを尊重し，お接待を断る事例も少なくない。

お接待には，個人接待，霊場付近の村落民による接待，接待講の 3 種類ある。特に，霊場付近の村落民による接待は，現代においては老人会や地域の行事として行われているものが多く，地域の人々の間の交流や町おこしの意味を込めて行われている。

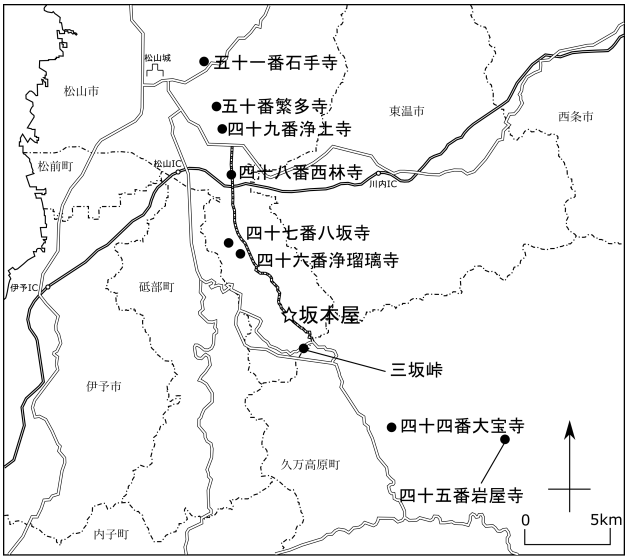
Ⅱ．研究対象地域の概要

1）久谷地区

本研究で調査対象とする坂本屋が位置する松山市久谷地区は，人口 10,078 人，世帯数 4,795 世帯で，松山市の南部に位置する田園地帯である。久谷地区は松山市の南部，重信川の左岸に位置する。久谷地区の中央には谷間が南北に通っており，この谷が久谷地区の重要な水系の御坂川となっている。久谷地区は谷で閉ざされた土地のため，人々が集まりやすい地形である。久谷地区は御坂川を南北軸として，南部の中山間地域と重信川流域の低地部に分けられ，中山間地域が坂本地区，低地部が荏原地区である。本研究で対象とする坂本屋は坂本地区の標高約 280m地点に立地している。面積の約 70%が山地で南高北低の地形となっており，北部の低地は松山平野と連なっている。南部の最も標高の高い地点は 710mであるが，ここが四国遍路において難所とされる三坂峠である。三坂峠は松山市と久万高原町の境となっており，そこから，松山平野や瀬戸内海を一望できる（水口，1967）。

次に交通について，久谷地区には主要な道路として国道 2 路線，県道 4 路線が存在する。久谷地区まちづくり協議会（2021）によると，松山と高知を結ぶ主要道路であった土佐街道を基に開通した国道 33 号線に加え，旧国道 33 号線の国道 440 号線が通っている。県道は愛媛県伊予市から東温市まで東西に通る県道 23 号線に加え，松山市南部から東部を通る県道 40 号線，久谷地区から重信川の北側に位置する森松町を結ぶ県道 194 号線，松山市窪野町から重信川南側に位置する小村町を結ぶ県道 207 号線が通っており，様々なルートで松山市や伊予市，東温市からの移動が可能である。しかし，国道 33 号線は開通の際に自動車の通行を考慮し，砥部町を経由する道路となったため，三坂峠を越えて久谷地区を通過する土佐街道は次第に利用されなくなった。また，久谷地区では高齢化が進み，加えて，バス路線の廃止など公共交通機関がほとんどないため，住民にとって交通アクセスは十分なものではない（第 1 図）。

久谷地区の人口をみると，その大部分が標高 200m以下に分布している。また，久谷地区には小学校が 2 校，中学校が 1 校，公民館が 2 つ存在する。小学校について，荏原小学校は低地部の荏原地区にあり，御坂川から約 300m東側に位置する。また，荏原小学校と御坂川の間に荏原公民館が位置する。一方，坂本小学校は中山間地域である坂本地区に存在し，御坂川の西側沿いに位置する。また，坂本小学校から約 400m南に坂本公民館が存在する。久谷地区唯一の中学校である久谷中学校は荏原小学校と坂本小学



第 1 図　坂本屋周辺概要図

校のほぼ中間地点であり，御坂川の西側に位置している。

次に久谷地区の歴史についてである。堀内（2000）によると，藩政時代に谷が 9 つ存在したため九谷（九渓）と名付けられた後，佳字に改められたことから久谷と呼ばれるようになった。久谷地区は旧荏原村と旧久谷村の 2 つの村からなっており，1956 年 9 月に両村が合併し久谷村となった。その後，1968 年に松山市に合併され，現在の久谷地区となった（久谷地区まちづくり協議会，2018）。また，三坂峠の由来は，東雲小学校 PTA（1973）によると，岳に対する美称として御岳（みたけ）と呼ばれるように，坂の美称として御坂（みさか）と呼ばれるようになり，三坂と表記されるようになった。

2）坂本屋を中心とした遍路道

本稿の研究対象地域である久谷地区における遍路道として，松山と高知をつなぐ土佐街道が通っている。かつて松山の城下との物資交流において重要なルートであった土佐街道は，久谷地区を通る街道の他に土佐藩主が参勤交代で使用した笹ヶ峰などいくつか存在する。久谷地区には松山から三坂峠，久万高原町を経て高知県へ入る土佐街道が通っており，愛媛県教育委員会文化財保護課（1995）によると，松山市では久万街道，久万高原町では殿様道，殿様街道と呼ばれている。幕藩体制で成立した旧土佐街道は急峻な坂道が続く難所となっていたため，1894（明治 27）年に砥部を通る三坂新道が土佐街道の西側に建設された。その後，1967 年には国道 33 号線の改修が行われた。

土佐街道の通る久谷地区は文化財などの史跡伝説の町でもあり，四国遍路の第 46 番札所の浄瑠璃寺や第 47 番札所の八坂寺に加え，松山藩主の意向により南方村（現在の東温市）から入床屋として東方に分家された渡部家住宅，四国遍路発祥とされる弘法大師ゆかりの寺院である文殊院，久谷支所西南に位置する河野家十八将の首座であった平岡氏の居住である荏原城跡，弘法大師の伝説が残る網掛け石など多くの歴史的背景を持つ名所が存在する（第 2 図）。

先述の荏原地区に立地する渡部家住宅は，坂本屋と同様にお接待を行っている。渡部家住宅でのお接待は，坂本屋運営委員会会員による提案をきっかけにまちづくり協議会の会員と渡部家住宅の持ち主によって始められ，現在では約 20 人の会員によって運営されている。また，坂本屋から荏原地区方面に 3km ほど北に丹波の里接待所というお接待所が存在する。丹波の里接待所では毎週土曜日に近隣住民によって持ち寄られた食料を用いた食事の提供などのお接待が行われており，遍路者だけでなく近隣住民にとっても憩いの場となっている。

遍路道におけるお接待所の坂本屋は，久万高原町に位置する第 45 番札所の岩屋寺から三坂峠に至り，そこからは自転車の通行できない旧道を下った先に位置している（第 2 図）。三坂峠の標高 700m地点から坂本屋のある標高 200 m地点へ一気に下る際，遍路者にとって難所であるなべわり坂と呼ばれる険しい道が続く。道の途中には店舗は存在せず，木でできた小さな休憩所が設置されているのみである。こうした難所とされる険しく長い道のりを超えた先に現れる坂本屋は，遍路者が休息を取るのに最適な位置にある（第 3 図）。

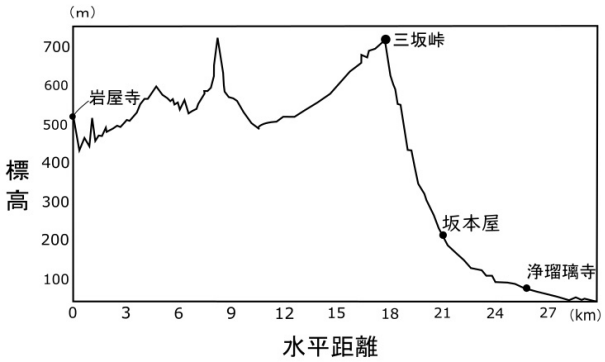
Ⅲ．坂本屋運営委員会の活動状況

本章では，聞き取り調査から明らかになった坂本屋の活動内容や地域との関わりについて述べ，調査結果をもとに坂本屋が久谷地区に対して与えている影響と坂本屋特有の価値について明らかにする。

1）坂本屋運営委員会発足の背景と活動内容

まずは坂本屋発足の背景について，聞き取り調査の内容をもとに述べる。坂本屋は明治時代末期から大正時代に建てられた木造の遍路宿であった。もともとは船田氏が所有している住宅であった。昭和初期までは休息・宿泊の場として賑いを見せていたが，昭和初期に廃業した。その後，古民家研究専門の大学教授が坂本屋の建物としての価値に惹かれ，地域住民が坂本屋を後世に残すことになった。

第 2 図　研究対象地域概要図



第 3 図　坂本屋周辺の遍路道断面図
（地理院地図より作成）

2004 年春にフリーライターやテレビ愛媛など多くの作業協力者のもと，修復作業が行われた。当時松山市長であった現愛媛県知事の中村時広氏も何度か立ち上げの様子を見学に訪れていたと言う。その当時立ち上げ会員だった A 氏が市長や新聞社社長と坂本屋と団体をつなぐ重要な役割を果たした。そして，2004 年には「NPO 法人 NORA」という 6 人で構成される坂本屋の保全を目的とした団体が発足した。次第にこの NORA と地域の運営団体が合流し，現在は「坂本屋運営委員会」となった。復活した旧遍路宿が地域づくりの拠点となるように，坂本地区にあるので，「坂本屋」と名付けられた。坂本屋設立以前は，坂本地区の地域内のつながりは薄かったと言う。坂本屋運営委員会の会員について公募はしておらず，地域内のつながりの中で現在の会員が構成されている。現在の坂本屋には遍路宿当時の宿泊機能はなく，お接待や地域の交流の場としての機能を担っている。坂本屋の管理は坂本屋運営委員会が行っており，市や企業から助成金を得て，施設の清掃や管理を行っている。具体的には，これまで坂本屋の駐車場の整備や屋根外壁の新調，トイレ工事などを行ってきた。

ここからは坂本屋運営委員会の具体的な年間活動内容について述べる。坂本屋運営委員会は 3 月～11 月の土曜日と日曜日の 9 時～15 時に活動している。坂本屋の施設自体は休館中（12 月～2 月）も利用可能である。坂本屋運営委員会は 2020 年度 33 人で構成されている。毎回全員で活動するのではなく，基本的には 4～6 人のグループごとに月に 1･2 回担当を決めて活動をしている。主な活動内容は，三坂峠から下ってきて坂本屋前を通過する遍路者に声をかけ，お茶やお菓子を無償で提供したり休息を促したりすることで，遍路者の疲れを癒すことである。坂本屋ではお接待を完全に無償で行っており，見返りは求めないお接待の精神を持っている。お接待の際には遍路者以外の地域の住民や観光客にも声をかけ，休息をとるように促している。

2020 年からは遍路者の属性や遍路の目的を把握するために，ノートに訪問者を記録している。お接待の空いた時間には個人の趣味活動をしており，料理が得意な人は昼食を作りふるまったり，農業を行っている人は自分で育てたものを提供したりしている。他にも，団体の会員で坂本地区イベントに参加することもある。

2）坂本屋運営委員会所属会員の属性

坂本屋運営委員会所属会員の属性について説明する。坂本屋運営委員会の役職は，会長・副会長・会計・庶務・監査・理事・相談役で構成されており，会員の半数は何らかの役職についている。以下では会員が坂本屋に参加したきっかけを 3 つのパターンに分けて説明する。

まずは，知人に誘われて参加した会員である。久谷地区窪野町在住 60 代男性は，会の元会長に声をかけられ，坂本屋の活動に参加するようになった。会ではホームページの管理などを行っている。松山市城北地区の谷町在住 70 代男性は，以前自身の部下であった坂本屋運営委員会の会員に坂本屋の活動を紹介され参加するようになった。坂本地区出口在住の 60 代女性は，前副会長に誘われて会に参加するようになった。現在では坂本屋の障子の張替え作業や掃除・整理整頓作業を主に請け負っている。窪野町在住 60 代男性は，初期会員から活動内容を聞いて興味を持つことで参加するようになった。現在では坂本屋が自身にとって安心できる空間であり，新しい交流が生まれる場所となっている。

次に，自身の興味をきっかけに活動に参加した会員について記述する。松山市南梅本町在住の 40 代男性は，もともと郵便局で働いており，坂本地区で郵便物配達途中に偶然坂本屋を見つけ，そこから興味を持ち，坂本屋の活動に参加することになった。20～30 代女性は，自身が遍路者でもともと四国遍路に興味があったため，坂本屋の活動に参加するようになった。

最後に，別の活動をきっかけとして参加することになった会員について記述する。伊予市在住 60 代男性は，坂本小学校の教員として坂本屋の活動に参加していた。坂本小学校の教員は地域との関わりを持つために坂本屋の活動に参加することになっている。坂本小学校から転勤後，松山市中心部の小学校で勤務する中で，坂本屋や坂本地区での活動が充実していたことに気づき，教員退職後も久谷地区外から坂本地区の活動に参加している。

この 3 つのパターンのように，地域内外の人のつながりや活動内容への興味をきっかけとして活動に参加している会員がいることが分かった。

次に，坂本屋運営委員会の会員の居住地について分析する。坂本屋の会員の居住地は坂本屋に隣接する窪野や奥久谷といった坂本地区が多く，隣町である浄瑠璃町や恵原町にも在住者がいる。しかし，松山市に隣接する伊予市や松山市谷町，久米，梅本など，久谷地区以外の場所に在住する人も所属している。会員同士も坂本地区内でのつながりがあったわけではなく，坂本屋ができてから坂本屋を起点として小学校や市域の人々とのつながりができた（第 4 図）。

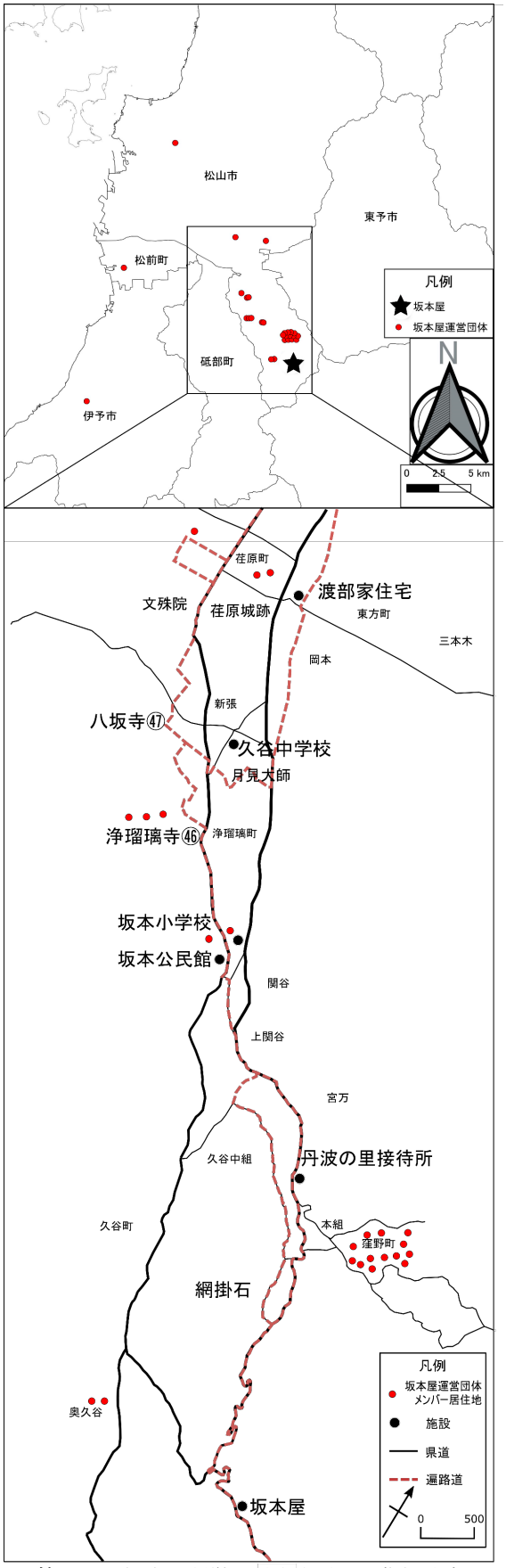
次に，性別や年齢について分析する。性別は男性が 22 人，女性が 11 人と男性が 2 倍多く所属している。年齢は 20 代～80 代まで幅広く所属しているが，60 代が最も多く，50 代，70 代あたりに多く分布している傾向がある。20 代は 1 名のみである。こうした年齢構造から，坂本屋運営委員会では後継者不足が懸念されており，解決が急がれる課題の一つとなっている。

3）坂本屋を訪問する遍路者の属性分析

本節では，坂本屋を訪問した遍路者の居住地の分布とその傾向を明らかにするために，坂本屋運営委員会が訪問者の情報を記録している「お接待日誌」をデータベース化して分析を行った。「お接待日誌」にはお接待の担当者によって，遍路者を含むすべての訪問者の居住地・性別・人数・日付・時刻および訪問の目的が手書きでノートに記録されている。本研究ではこのデータベースから 2019 年 3 月～2021 年 10 月に記録された居住地のデータを抽出し，国内の場合は都道府県別に，海外の場合は国別に人数を計測した。なお，居住地が記載されていないデータも多くあり，すべての訪問者の都道府県，国を把握することは出来なかった。計測の結果，上記期間の総訪問者は 1,268 人で，そのうち海外からは 64 人であった。このうち 388 人は居住地の記載されていないデータであったため，分析に使用した人数は 880 人となった。

年別の訪問者数をみると，2019 年の訪問者は 762 人で，そのうち海外からは 64 人であった。コロナ禍の影響を受けた 2020 年の訪問者は 320 人で，海外からは 0 人であった。2021 年の訪問者は 10 月までで合計 186 人で，海外からは 0 人であった。

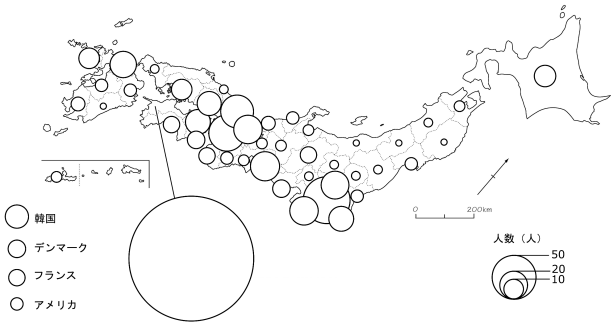
都道府県別の訪問者数をみると，最も多いのは愛媛県 407 人で，全体の約 32％を占める。愛媛県内からの訪問動機は遍路以外に，坂本屋の見学，ランニングの途中，まつ



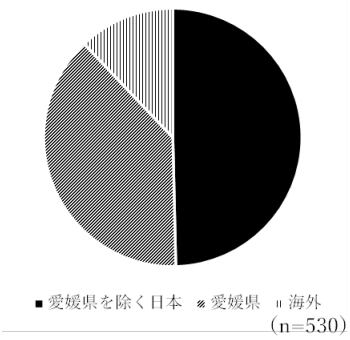
第 4 図　坂本屋運営委員会会員の居住地分布
（聞き取り調査より作成）

やま謎解きクイズラリーというイベント参加などである。続いて東京都 57 人，大阪府 34 人，兵庫県 28 人，愛知県 22 人，神奈川県・京都府 21 人，千葉県 20 人と 7 都府県が 20 人以上で続いている。0 人だった島根県・佐賀県を除く 45 都道府県から訪問者が存在する。分布の特徴としては，四国・山陽の人数は多いが，東北・北陸は少なくなっており，近接性が見られる。しかし，最多は東京都であり，その他にも愛知県・神奈川県・千葉県・埼玉県など近接性の低い東日本からも多く訪問している。西日本では大阪府・兵庫県・京都府・福岡県と人口が多い地域が訪問者も多くなっている。愛媛県内からの訪問者は久谷地区や坂本屋そのものへ訪問動機があるのに対して，県外からの訪問者は目的が遍路へと純化していくため，訪問圏は全国へと広がる。そのため，近接性よりも人口規模のほうが重要な要因になっている（第 5 図）。

海外からは 2019 年に 64 人が訪れており（第 6 図），国別の上位は韓国が最多の 14 人，デンマークが 8 人，フランスが 7 人，アメリカ合衆国が 4 人と続く。韓国からの訪問者が多いのは団体客がいたためである。大陸別の内訳はヨーロッパが最多の 29 人，アジアが 19 人，北アメリカが 6 人，南アメリカとオセアニアがそれぞれ 3 人，アフリカは 0 人となっている。坂本屋運営委員会によると，近年では欧米からの遍路者が増加していたという。その理由としては，ビジット・ジャパン・キャンペーンなどによって訪日外国人客が増加し，インターネットや SNS で取り上げられたことによって，認知度が高まったことが挙げられる。また，2007 年に NHK ワールドが四国遍路番組を制作し，世界中に放送されたことも理由の一つである。その後，英語版四国遍路ガイドブックの出版や，海外のテレビ局による四国遍路の番組が制作された。しかし，新型コロナウイルス感染拡大の影響を受けて，2020 年春以降坂本屋を訪問した外国人遍路者はいなかった。



第 5 図　坂本屋の来訪の遍路者分布（2019 年）
（お接待日記より作成）



第 6 図　地域別の坂本屋来訪遍路者数（2019 年）
（お接待日記より作成）

4）坂本屋の地域との関わり

本節では，坂本屋運営委員会の会員を対象に行った聞き取り調査や現地調査から得たデータを用いて，坂本屋運営委員会と地域での行事や地域住民との関わりについて述べる。坂本屋運営委員会は 4 月にひな祭りと総会，7 月にかぶと虫取り，10 月にふるさとウォーキングと亥の子作り，12 月には餅つきと注連縄作り，1 月には坂本校区駅伝大会を行っている（第 1 表）。ひな祭りと総会については坂本屋運営委員会が主催，かぶと虫取り，ふるさとウォーキング，亥の子作り，坂本校区駅伝大会については坂本公民館，坂本小学校との共同事業，餅つきと注連縄作りは坂本公民館と坂本小学校に加え，老人クラブとの共同事業である。総会では坂本屋運営委員会会員で東温市の坊ちゃん劇場での観劇に加え，温泉に行っており，ひな祭りでは坂本屋でお雛様の展示を行っている。坂本公民館，坂本小学校との合同行事である坂本校区駅伝大会では，地域住民へのぜんざい提供によるお接待を行っている。また，坂本屋運営委員会は地域や小学校主催の行事にも参加しており，6 月の奥久谷蛍祭りと 3 月の坂本小学校の文化交流会において屋台出店を行っている。しかし，奥久谷蛍祭りは現在開催されていない。高齢化が顕著であり継続が困難な奥久谷から，今後は窪野に場所を移してほたる祭りを再開する予定である（第 2 図）。

次に，行事を介さない坂本屋と地域との関わりについて述べる。坂本屋では，団体会員同士による食べ物の持ち寄りや近隣住民からの果物の持ち寄りが行われていた。持ち寄られた食べ物はお接待時に提供される。また，コロナ禍以前は外国人遍路者への対応のため，何人かの会員が月に 1 度ワンコイン英会話教室に通っており，英語を共に学ぶ小学生と関わる機会となっていた。坂本屋運営委員会は今後も地域との関わりをより強く持っていきたいと考えている。具体的には，前述したワンコイン英会話教室を復活させることや，森の幼稚園，紙芝居など特に子どもと関わりを持つような行事を考えている。

運営団体の活動の経費は，お接待では遍路者から金銭をもらわないため，坂本屋運営委員会の年会費と前年度までの繰越金によってそのほとんどが賄われている。その他，NPO 法人としての資金や，公民館での活動の謝礼として寄付される資金があるが十分ではない。2004 年の改修の際には行政や企業，銀行から金銭的な補助を受けた。松山市からは補助金を得るとともに，会員が市観光協会や寺社，伊予鉄グループに依頼することで資金を得てきた。

以上から坂本屋運営委員会は行事を介して地域との関わり，特に坂本小学校と坂本公民館との関わりを密に持っており，坂本屋という場所において運営団体会員同士の関わりや近隣住民との関わりも密に取られている。

5）坂本屋運営委員会の課題と今後の展望

本節では，坂本屋の運営団体が感じている今後の課題と展望について主に 3 点に分けて述べる。

第 1 に後継者問題である。前述したように，坂本屋運営委員会の会員の年齢層が高いため，今後の活動継続に関して，会としては若い世代の坂本屋運営委員会への加入を望

第 1 表　坂本屋年間スケジュール

	イベント	休業期間	内容
4月	総会		坊ちゃん劇場観劇＋温泉
	ひな祭り		お雛様の展示
6月	奥久谷ほたる祭り		蛍祭りでの屋台出店
7月	かぶと虫取り		公民館，小学校との共同事業
10月	ふるさとウォーキング		公民館，小学校との共同事業
	亥の子作り		公民館，小学校との共同事業
12月	杵と臼による餅つきと注連縄作り	休	公民館，小学校，老人クラブとの共同事業
1月	坂本校区駅伝大会	休	公民館，小学校との共同事業　ぜんざいお接待
3月	坂本小学校の文化交流会		文化交流会での屋台出店

（坂本屋ホームページより作成）

んでいる。そのためにはお接待の体験会など里山移住のきっかけづくりを通し，地域外の人々や若い力を巻きこんでの活動を行うことが必要になると考えている。坂本屋運営委員会の会員は，地域が衰退する原因として，久谷地区で少子化が進んでいることにあると推測しており，子どもが増えれば，活気のある場所になると見込んでいる。そして，坂本屋がその活気を生み出す久谷地区の中心としての役割を担い続けたいという思いがある。そのために，久谷で生まれた子どもたちが都市に出てもまた戻ってくるような，楽しい活動をする必要があると考えている。現時点で，愛媛県の代表的な観光地である道後温泉への観光客に久谷地区まで立ち寄ってもらうことを目的として，道後と久谷地区にある一遍上人由来の寺院関連ツアーを実施することなどを企画している。このようなツアーを実施する中でお接待を体験してもらい，さらには久谷の自然に魅力を感じ，里山への移住者やＩターン者が増えることも期待している。このような期待のためには久谷地区の自然を守り続ける努力をする必要があると認識している。

第 2 の課題として，今後の維持管理，資金調達について述べる。前節で述べたように，コロナ禍以前は公民館事業による収入が若干あったが，現在は公民館事業がないので他の調達の方法を考える必要性に迫られている。企業との関わりを持つことができれば活動の幅も広がると考えている会員もいる。

第 3 の課題として，お接待のデジタル化について述べる。坂本屋運営委員会の総務担当でホームページを作成している男性は，デジタル社会の波に乗り，お接待もデジタル化するという新しい取り組みについて考えていた。具体的には，お接待を行っていない平日にはロボットが代わりに遍路者に声掛けを行ったり，言語が通じない外国人への通訳として活動したりということを構想している。前述したように，コロナ禍以前は多くの外国人観光客が坂本屋を訪問していたため，コロナ禍が収束すれば多くの外国人観光客が訪れると予想している。先述した来訪者のデータからもわかるように，坂本屋には韓国やヨーロッパ，アジアなど全世界から遍路者が訪れている。実際に，全く日本語のわからない外国人観光客が 1 人で坂本屋に訪れたこともあり，言葉が通じないので対応に困ったと言う。このように英語だけではなく，多様な言語の訪問者に対応していくためにも，最新の技術を取り入れたお接待とこれまでの伝統的なお接待を組み合わせることで，お接待の活動の幅を現在よりも広げる可能性がある。

Ⅳ．坂本屋の地域的役割

坂本屋の地域的役割について述べていく。

まずは，坂本屋の立地について述べる。久谷地区で坂本屋は，難所といわれる三坂峠を下ったところにあり，その立地は遍路者にとっては長旅の疲れを癒す貴重な場所となっている。さらに，現在は遍路宿が減少し遍路者が休息する場所が少なくなる中，施設を長期間使用することのできる坂本屋は遍路者にとって建物自体が貴重な存在となっている。坂本屋が開かれていることで，通常は北から南に遍路道を進む「逆打ち」といわれる逆ルートで遍路する人もいた。これは坂本屋が三坂峠の手前に存在することで，険しい道のりを越える前に休息し，遍路に向かう人が多いからだと考えられる。また，坂本屋の存在により，久谷地区の奥地まで観光客が訪れ，坂本屋を起点として観光することで久谷地区全体の地域資源の発掘につながることも指摘できる。坂本屋運営委員会は今後も坂本屋を起点として久谷地区を活性化し，久谷地区への移住者が増えることを望んでいる。

次に坂本屋運営委員会の会員の特徴について述べる。坂本屋運営委員会の会員は坂本地区以外の地区からも訪れている。初期は坂本地区の会員が中心であったが，次第に誘い合わせや活動自体に惹かれる参加者によって他地域からも坂本屋運営委員会に加わるようになった。ここから，坂本屋は坂本地区の人々のみの集まりではなく，久谷地区，松山市へと徐々に人々のつながりを広げていった。このことから，坂本屋はお接待所としての役割だけではなく，地域の交流の場としての役割を果たしていると言える。お接待所としての役割と地域の交流の場としての役割の両方を果たす坂本屋は久谷地区にとって貴重な存在であり，坂本地区と他地域をつなぐ重要な役割を果たしていると考えられる。また，坂本屋運営委員会の会員間でのつながりは強く，坂本屋でのお接待や地域活動が会員の生きがいの創出につながっていることを指摘できる。これより，会員個人同士のつながりが活動の交流の中で広がり，坂本屋を起点として，坂本地区，久谷地区，松山市というように地域間のつながりを強化する役割を果たしていると言える。

3 点目として，坂本屋の本来の目的であるお接待について述べる。坂本屋にはコロナ禍以前，多くの外国人遍路者が訪れていた。このことから，遍路者が坂本屋を訪れることによってお接待という文化に触れ，四国遍路の魅力についてより深く理解することにつながる。このように坂本屋

は外国人遍路者と四国遍路文化をつなぐ重要な役割を果たしていると考えられる。外国人遍路者が坂本屋に訪れたことをきっかけとして，ブラジルからのテレビ放送依頼が来たこともあったと言う。そのため，坂本屋の活動が今後も遍路文化を全世界へ広げるための手段として重要な役割を果たすことが期待される。遍路者は愛媛県内からの訪問が一番多い。しかし，四国他県からの遍路者は少なく，愛媛県の次に都心部からの遍路者が多い。このことより，四国内だけではなく，全国に四国遍路文化が浸透していると言える。

そして，地域と関わりの中での坂本屋の役割について述べる。第 1 表に示すように，坂本屋は特に地域の公民館，小学校の行事と密接に連携してきた。よって，坂本屋は幅広い世代の人々と交流し，地域内につながりを生み出していると言える。また，坂本屋の建物自体を企業や自治体と協力して保存・活用する取り組みを行っており，地域間の交流の他に，文化財の保護にも貢献している。

最後に，坂本屋の今後の展望と課題について述べる。坂本屋運営委員会は久谷地区全体が活気あふれる地域になるように，新たな取り組みを考えている。こうした取り組みを通して，若い世代に坂本屋の魅力を知ってもらい，さらには坂本屋が立地している久谷地区の魅力にも触れてもらうことが期待される。そうした取り組みの経緯により，坂本屋が課題としている後継者問題や少子高齢化の解決につながると考えられる。

以上のように，坂本屋遍路者へのお接待所としての本来の役割に加え，地域の人々を結びつける結節点，人々の生きがいを創出する場，地域の重要な資源としての 4 つの役割も担っている。そして，これほど多くの役割を有する施設は貴重な地域資源であり，坂本屋特有の役割であると言える。

V．おわりに

まずは，坂本屋での聞き取り調査を通して，研究目的に対して明らかになった結論を述べる。坂本屋の活動をきっかけに坂本屋運営委員会の会員間以外にもつながりが生まれ，人々のつながりも含めて個人の生きがいの創出につながっていると明らかになった。このつながりの様に，坂本屋という建物が人を呼び，人々が集う場所の中心になることで坂本屋は今後も久谷地区を盛り上げる重要な役割を果たす。

ここからは，結論に対する筆者の見解を述べる。

お接待を受ける人が楽しんで過ごしているのは，坂本屋運営委員会の会員が楽しんでお接待を行っているためだと感じた。数回の聞き取り調査を通し，遍路者でない私達に対しても食べ物を提供してくださり，奉仕精神の強さを実感した。総じて坂本屋運営委員会の会員は，お接待に必要不可欠なおもてなしの精神を強く持っていると分かった。この，お接待の根源とも言えるおもてなしの精神が海外遍路者や地域の人に伝わることで，坂本地区が温かく住みやすい場所であり続けることができると考える。さらに，坂本屋の活動が，坂本屋運営委員会の会員がそれぞれ得意なことを披露する場，生かす場として活用されている。それがお接待に生きることも大いにあり，それも含めてお接待活動となっている。また，坂本屋は運営団体の管理によってきれいに保たれており，障子の張替えやトイレ掃除などの掃除整理作業も定期的に行われている。このように，坂本屋運営委員会の会員は坂本屋の建物自体も大切に管理し，そうした取り組みにより坂本屋を次世代に受け継ぐことができると考えられる。今後は道後とのツアー計画を行い，久谷地区自体の知名度をあげることで，坂本屋運営員会の後継者問題も解消されると考える。

本報告書を作成するにあたり，坂本屋運営委員会の会長菅野肇氏，副会長橘 秀敏氏をはじめとする坂本屋運営委員会の皆様には大変お世話になりました。渡部家住宅の皆様，丹波の里お接待所の皆様にも貴重なお話を伺い，ご協力いただきました。以上厚く御礼を申し上げます。

文　献

愛媛県教育委員会文化財保護課（1995）：『愛媛県歴史の道調査報告書第二集　土佐街道　三坂越え』愛媛県教育委員会.

久谷地区まちづくり協議会（2021）：『くたにぶらり見て歩き』.

松井圭介（1993）：日本における宗教地理学の展開．人文地理，45，75-93.

モートン常慈（2020）：四国遍路におけるホスピタリティと国際友情．成形加工，32，159-162.

森 正人（2001）：遍路道にみる宗教的意味の現代性－道をめぐるふたつの主体の活動を中心に－．人文地理，53，75-91.

一般財団法人へんろみち保存協力会編（1990）：『四国遍路

ひとり歩き同行二人』地図編.
東雲小学校 PTA（1973）:『松山市　久谷町周辺の歴史　史跡名勝文化財伝説』.
堀内統義（2000）:『愛媛の地名－小さきものへのめまい－』財団法人愛媛県文化振興財団.
水口三郎（1967）:『久谷村史』副新印刷所.
Tanaka. H.（1981）: The evolution of pilgrimage as a spatial-symbolic system. *The Canadian Geographer*, 25, 240-251.

参考資料

四国遍路情報サイト：https://pilgrim-shikoku.net/henroworshipmanners-meansofpilgrimcostume　（最終閲覧日：2021 年 2 月 23 日）
四国遍路世界遺産推進協議会 HP：https://88sekaiisan.org/（最終閲覧日：2021 年 2 月 23 日）
久谷地区-松山市社会福祉協議会：pdf-page0168_59_33-kutani.pdf (matsuyama-wel.jp)（最終閲覧日：2021 年 2 月 23 日）
久谷地区まちづくり協議会（2018）:まちづくり通信くたに第 3 号.
坂本屋 HP：https://sakamotoya-henro.jp/about/（最終閲覧日：2021 年 2 月 28 日）

写真 1　遍路道（三坂峠の下り）
（2021 年 10 月　松崎撮影）

写真 2　三坂峠から見た久谷
（2021 年 10 月　西岡撮影）

写真 3　坂本屋の概観
（2021 年 10 月　西岡撮影）

写真 4　網掛け石
（2021 年 10 月　須藤撮影）